

ベルクソン哲学と脳科学

— 記憶理論を中心に —

沖政 裕治

はじめに

ベルクソンは 1896 年に発表した『物質と記憶』において「記憶は脳から独立して実在する」ことを主張している。この独創的な記憶理論は、今日の私たちの常識からすれば非常に奇妙である。しかし、逆説的だが、一見非科学的に見えるベルクソンの記憶理論は、当時の科学的な記憶研究が蓄積してきた実証的データや症例を参照し、科学者たちが下した解釈を批判的に検討することで導かれているのである。ここにベルクソンの記憶理論のもっとも興味深い点のひとつがある。

本小論では、まず現代の脳科学の見地から、ベルクソンが自説の証明のために援用する症例、データを検討し、今日の脳科学の記憶理論の成果がベルクソンの記憶理論を覆す反証となりえる可能性があることを示す。しかし、このことは、ベルクソンの記憶論がすでに過去の遺物であり、もはや有効な意味を持たないことを意味するのだろうか？ この問いに対する答えは、たとえどれほど脳科学が進歩したとしても、決して解き明かすことのできない問題が残ることを考えれば見つかるのではないだろうか？ たとえば、脳科学はモーツァルトを聴いたときの感動に対応すると考えられる脳の特定の活動を見つけることはできても、特定の脳の活動から「モーツァルトを聴くときにえられる感動」を導くことはできない。このことについて、ベルクソンが次のように言っているのは非常に示唆的である。

Qu'il y ait solidarité entre l'état de conscience et le cerveau, c'est incontestable. Mais il y a solidarité aussi entre le vêtement et le clou auquel il est accroché, car si l'on arrache le clou, le vêtement tombe. Dira-t-on, pour cela, que la forme du clou dessine la forme du vêtement ou nous permette en aucune façon de la pressentir? Ainsi, de ce que le fait psychologique est accroché à un état cérébral, on ne peut conclure au « parallélisme » des deux séries psychologique et physiologique. MM¹⁾, p.2.

つまり、脳科学はある精神現象に対応する特定の物理現象を見つけることはできても、そもそもなぜ脳の物理現象が私たちの意識をつくりだすのかには答えていないのである。脳の活動とは血液循環、ニューロン（神経細胞）を走る電気信号、脳内物質の分泌とそれらの化学反応などのことだが、これらの働きから具体的な出来事を想定することは一種の《錬金術》²⁾ であるとさえいえるだろう。

もちろん、科学がたとえ真実を語っていないとしても、その技術が现实生活の役に立てばそれで十分であるという立場をとる人もいる。科学技術は、脳腫瘍の手術を可能にし、鬱病などの精神的な病に効果のある薬品の開発に成功している。このように科学を目的達成のための手段として扱う立場を茂木健一郎氏³⁾ は「実証主義」（非プラトン主義、形式主義）と呼んでいる。しかし、役に立つ、実効性があるということと、それが正しい、真実である、という価値判断とは別問題である。たとえば、銃や麻薬はどちらも実効性のあるものだが、使用の目的によってその善し悪しが変わってくる。銃の場合、殺意をもって使えば犯罪であるし、暴漢から身を守るために使えば正当防衛である。麻薬は、手術で使えば正当な医療行為であるが、乱用すれば中毒を起こす。このように実証主義的な立場では問題を一面からしか捉えることができないのである。

これに対して科学理論そのものの探求を純粋な目的とする「実在主義」（プラトン主義）がある。この立場は基本的には理論を扱う数学者、理論物理学者のものでり、その役割は自然科学の観点からひとつの基本的な世界観を提示することにある。アインシュタイン（相対性理論）、シュレディンガー（量子力学）、ド・ブロイ（物質は波の性質をもつという説）、デビッド・ボーム（量子力学正当派への反論）、ロジャー・ペンローズ（宇宙論、ツイスター）など、たんなる一理論ではなくひとつのジャンルを形成するほどの根幹となる世界観を提唱する科学者はすべて実在主義者である。もちろん、実在主義の理論は直接には人の命を救ったり、巨額の富を産んだりしないという意味で、まったく役に立たないように見える。しかし、逆説的にも実証主義者は役に立たない実在主義者の理論を手段として使うことで、新しい役に立つ技術を生み出すという相関関係があるのである。たとえば、遺伝子技術は今日最もその成果が目されている研究分野であるが、「遺伝子」という概念はもともとメンデルの法則を説明するための仮想的な単位であった。つまり、はじめ理論として提示された概念が後の

DNAの発見につながり、クローンに代表されるような最先端の技術へと発展したのである。このように実在主義が提示する世界観は実証主義が実現する新しい技術を生み出す源泉としての役割を果たしているのである。

ところで、このような科学の「実証主義と実在主義の関係」はベルクソン哲学では「科学と哲学の関係」に対応している。ベルクソンは科学を現実生活での行動に役立つ知識であると考え、これに対して哲学を実在の真理を認識するための探求であると捉えたり⁴⁾。このことを考えると、科学という言葉だけが、世界を語りつくす万能の道具ではなく、別の媒体にもその存在意義があるといえるのではないだろうか。その媒体のひとつに「哲学」という選択肢があることを示すのが本小論の目的である。

1. ベルクソンの記憶理論：記憶は脳に局在しない

まず始めに、ベルクソンが定義する脳と記憶の役割を簡単に見ておきたい。身体、脳、知覚は行動のための器官、機能である。これがベルクソンが提唱する定義である。そして、ベルクソンは記憶には二つの形式があるという。それは次のように分類される。

a) 身体的記憶：反復練習によって獲得された能力、習慣

例：ある文章を暗唱できる能力、自転車に乗れること、
ピアノ演奏

b) 独立的記憶：過去の反復不可能な日付のある経験、思い出

例：一回一回の練習の思い出、経験

また、記憶は思い出されてはじめて意味をもつ。よって記憶の再認（想起）にも二つの形式があるとされる。

a') 非注意的再認（無意識的再認）：身体的記憶の能力を自動的に実行すること

対象から生じる再認：受動的

現象形態：無意識的、自動的、機械的運動

例：通勤、通学の道順を意識しなくてもたどれること

b') 注意的再認（意識的再認）：現在の行動に必要な記憶を選択的に想起す

る

行動の選択肢に幅が生まれ、不確定性、自由度を高める
主体から生じる再認：能動的

現象形態：表象＝記憶－心像 (image・souvenir)

例：どこに財布を落としたか一日の出来事を思い出すこと

1-2. 注意的再認のメカニズム：脳と記憶の関係

記憶と脳の間を関係を考えるためには自動運動としての非注意的再認（身体的記憶）ではなく、主体の選択（意志）がかかわる注意的再認のメカニズムが重要である。ベルクソンは脳に記憶が局在することを否定する。なぜなら、脳の損傷によって失われるのは記憶ではなく、必要な記憶にアクセスして行動に反映させるための運動機構が阻害されると考えるからである。

[...] la reconnaissance se fait activement, par des images-souvenirs qui se portent au-devant de la perception présente ; mais alors il faut que ces souvenirs, au moment de se poser sur la perception, trouvent moyen d'actionner dans le cerveau les mêmes appareils que la perception met ordinairement en jeu pour agir : sinon, condamnés d'avance à l'impuissance, ils n'auront aucune tendance à s'actualiser.[...] Ce qui paraît lésé, ce sont donc les diverses régions sensorielles et motrices ou, plus souvent encore, les annexes qui permettent de les actionner de l'intérieur même de l'écorce, bien plutôt que les souvenirs eux-mêmes.

MM, pp.267-268.

脳は行動の選択を調整するコントロール・センター（中央電話局）である。そして、現在の有用な行動の可能性を提供するのが記憶というデータ・ベースである。外的な作用を知覚した脳は最適な行動を選択するために蓄積された過去の記憶を参照する。そして、選択された記憶を記憶心像として喚起することで記憶を新たな行動に反映させるのである。ここで重要なのは、脳と記憶どちらの役割も「行動」を中心に規定されていることである⁹⁾。行動可能性としての記憶。これがベルクソンの記憶の定義である。

2. 脳科学の記憶理論

それでは、このようなベルクソンの脳と記憶の理論を現代脳科学の観点

から検証してみたい⁶⁾。脳科学は精神現象を脳の活動によって説明できるというスタンスを前提としている。いうまでもなく、この立場は記憶は脳内に存在すると考えている。ベルクソンが具体的に批判した当時の脳科学の学説は、身体現象を知れば精神現象も理解できるとする「心身並行論」(le parallélisme)と精神現象は脳内の物質現象の一種の燐光のようなものとする「意識附帯現象説」(l'épiphénoménisme)である。これらの学説の共通点は、精神を物質の二次的現象とみなし、精神の独立性を認めない唯物論的立場に立つ点にある。ところで、私たちの意識の原因は脳内現象にあるとするこのような科学のスタンスは今日でも変わっていない。なぜなら、科学者たちが目を向けるのは脳の活動であって、心の活動ではないからである。

記憶と脳の関係について科学的な方法論で研究がなされ始めたのは、19世紀後半の失語症研究である。ブローカ、ウェルニッケらに代表される研究者たちは特定の言語障害をもつ患者の脳の損傷部分を特定することで、脳の局所的機能を発見することに成功する。20世紀前半のペンフィールドの脳外科手術は、脳に直接電気刺激を与えることによって脳機能の局限化をさらに精密にした。20世紀後半から今日にかけては分子生物学、遺伝学的な脳研究が盛んである。これらの細胞レベルの脳研究は、記憶はニューロンを走る電気信号であり、このインパルスのある一定以上の強さの持続によって形成されるニューロン間のネットワークが具体的な記憶の姿であることを解明している。このような現象を長期増強(LTP: Long Term Potentiation)と呼ぶが、利根川進らはこの現象が特定の遺伝子によって引き起こされることを発見している。(次ページに脳科学のこれまでの成果を特に失語症による言語機能の研究を中心にまとめる。)

2-1. 脳科学による反証：ニューロン・ネットワーク説との比較

失語症患者の脳損傷は記憶の喪失ではなく、記憶と知覚、記憶と行動を結ぶ運動機構の障害である。よって記憶は脳に局在しない。このようなベルクソンの記憶理論は現代脳科学では「ニューロン・ネットワーク説」で説明できるのではないだろうか。記憶の形成はニューロン回路の形成を意味する。ある記憶が忘れられた場合を考えてみよう。このときニューロン

脳科学研究史：脳機能とその対応部位（特に失語症による言語機能の研究を中心）

研究者名	時代	研究領域	研究方法	研究対象(症例)	対応部位
ガル (F. J. Gall, 1758-1828, 独)	18世紀	骨相学 (phrénologie)	観察	精神機能の優劣	頭蓋骨の凹凸
ダックス (M. Dax, 1770-1837, 仏) とブローカ (P. Broca, 1824-1880, 仏)	19世紀前半	失語症	死後の解剖	言語障害	脳の左半球(右利きの場合)
ブローカ (P. Broca, 1824-1880, 仏)	1861年	アフエミー (aphémie) (運動性失語, 純粋語啞)	死後の解剖	発語機能の運動性障害	左半球の第三前頭回後部三分の一, あるいは後半部
(ブローカ説の今日的見解)	20世紀後半		MRI a), PET b)等	発語機能の運動性障害	左中心前回の下半分, 他
ウエルニッケ (C. Wernicke, 1848-1904, 独)	1874年	感覚性失語	死後の解剖	話し言葉の理解障害	言語優位半球の第一側頭回後部三分の一から二分の一
(ウエルニッケ説の今日的見解)	20世紀後半	(純粋語聾)	MRI, PET等	話し言葉の理解障害	左側頭葉の皮質下
デジュリーヌ (J. Déjerine, 1849-1917, 仏)	19世紀末	視覚性言語障害	死後の解剖	読み書きの障害	左半球の角回
(デジュリーヌ説の今日的見解)	20世紀後半	(純粋失書)	MRI, PET等	書く能力の障害	左第二前頭回後部
(デジュリーヌ説の今日的見解)	20世紀後半	(純粋失読)	MRI, PET等	読む能力の障害	左後頭葉の白質
ペンフィールド (Wilder Penfield, 1891-1976, カナダ)	20世紀前半	脳神経外科(てんかん治療)	脳を直接電気刺激	記憶(フラッシュバック)	大脳皮質の内側にある上部脳幹(間脳)
ドナルド・ヘブ (米)	1949年	神経細胞(ニューロン)ネットワーク説	動物実験, 等	記憶	ニューロン間の高頻度のインパルスの持続
利根川進 (日本)	1987年	分子生物学, 遺伝学	ノックアウト・マウス d), MRI, PET 等	LTP c)の遺伝学的根拠(空間記憶)	海馬のCA1野の錐体細胞(興奮性ニューロン)の遺伝子(NMDA受容体 NR1 サブユニットの遺伝子)
				LTPの遺伝学的根拠(記憶の想起)	海馬のCA3野の反回性経路

a)MRI (Magnetic Resonance Imaging, 核磁気共鳴断層撮影装置): 電磁波を照射して, 脳全体の組織を画像で表現できる

b)PET (Positron Emission Tomography, 陽電子放射断層撮影装置): 脳の血のめぐりの変化をリアル・タイムで観察できる

c)長期増強 (LTP: Long Term Potentiation): シナプス間の持続的な高頻度のインパルス (現代脳科学の記憶現象の一般的定説。)

d)ノックアウト・マウス: 特定の細胞内の特定の遺伝子を破壊した特殊なマウス。もしある遺伝子の変異によって LTP の発現が阻害され記憶障害が発生すれば, その遺伝子がまさに記憶の源であるといえる。

回路内でのインパルスの発火は起きなくなる。しかし、一度形成された回路そのものは残存している。これは一時的に使われなくなった電気線のようなものである。この回路はふとしたきっかけで甦る可能性が当然ある。それが想起である。たとえば、学生時代の友人に十年ぶりに偶然町で会ったとしよう。およそ十年間はその友人についての記憶の回路はほとんど使われていなかったが、偶然町で出会うという出来事がこの回路を再生したことになる。このネットワーク説の説明はベルクソンの記憶喪失の説明に合致する。忘れられていたあいだはその記憶は意識のなかで眠っている。しかし、回路そのものは残存している。そして、偶然の出会いという知覚が記憶を呼び起こす。このように知覚と記憶を結ぶ運動機構をニューロン・ネットワークの回路に置き換えれば、ベルクソンの記憶論は説明可能となるのではないだろうか。さらに、ネットワーク説はベルクソンが局在論を否定する理由の一つに反駁できる。ある一つの単語ですら、話す人、また同じ人でも話し方によって無数のヴァリエーションがあり、さらに一つの単語は文脈によって複数の意味をもつ。このように一つの言葉だけでも無限とっていいほどの質的な差異があるのだから、有限の脳細胞に記憶が局在するのは無理がある。それゆえベルクソンは局在説を否定するのである。たしかに、一つの記憶に一つの細胞が対応するという細胞説では無数にある出来事に対応するのは難しい。しかし、ネットワーク説はこの数量の困難をある程度は解決する。たとえば、細胞説では10個の細胞は10の出来事にしか対応できないが、ネットワーク説なら順列組合せで「 $10! = 36,288$ 」もの飛躍的な拡大が可能になるのである。このようにネットワーク説は完全ではないがベルクソンが提示する根拠の反証になっている。

2-2. 海馬損傷の症例

局在論を否定する理由としてもうひとつあげられるのが記憶の喪失の仕方の事実である。記憶が局在するとすれば、特定の記憶は損傷によって永久に失われるはずである⁷⁾。ベルクソンは、症例を検討した結果、突発的な記憶喪失では画一的な記憶の喪失はないと結論する⁸⁾。「F」の文字だけを取り除く患者のケースは、その文字だけを除くということは潜在的に「F」の記憶はあると解釈される。

しかし、海馬損傷による局所的な記憶喪失のケースは明らかにベルクソ

ンの主張を覆すものである。この患者は、手術で海馬を切除した結果、古い記憶は正常だが、手術前2年間の記憶が失われ、新しい記憶が形成されなくなる。これは海馬という特定部位の損傷が少なくとも最近2年間の記憶と関係があることを意味している。そして、さらに重要なのはベルクソンの主張する、記憶障害は記憶と行動の運動機構の障害であるとする説はこのケースには当てはまらない可能性があることである。なぜなら、古い記憶に関しては正常に機能しており、記憶の喚起にも問題がないからである。この場合、運動機構の損傷という仮説では十分に説明がつかないのは確かである。ただし、ここでの批判は「記憶の喚起一般」という運動機構があるという前提に立つときのみ有効である。なぜなら、ベルクソンの立場に立って手術前二年間の記憶にかかわる運動機構のみが失われたという解釈も可能だからである⁹⁾。しかし、そもそもベルクソンの運動機構説が意図しているのが記憶の脳局在の否定だとすれば、ベルクソンの運動説ではこの海馬損傷の患者の記憶の局在性を否定できてはいないのは確かである。というのは、運動機構であれ記憶そのものであれ、脳の特定部位（海馬）と特定の記憶（機構）が密接に関係していることは否定できないからである。

さらにこれに加えて重要な事実がもうひとつある。それは、ベルクソンが自説の実証的な根拠として「私たちの過去の生活の一時期が、全部、突如として根こそぎ奪い去られるような健忘症においては、明確な脳の損傷は観察されない」¹⁰⁾という当時の臨床的事実をあげていることである。このことから、海馬損傷の症例は少なくともベルクソンが拠り所としていた事実の反証となるのではないだろうか。ベルクソンの記憶理論が、当時の事実を自説の根拠としているのであれば、当然その事実から導かれた仮説の蓋然性は失われるはずである。

このように現代の脳科学の仮説と症例はベルクソンが自説の証明のために援用する事実を反証するように思われる。それでは、私たちはベルクソンの主張を新しい事実によって覆された過去の仮説として否定すべきだろうか。ベルクソンは記憶局在説を否定するために失語症の事例を参照し、自説が事実に適応することを主張する。これは、科学的な帰納的推理に基づく証明である¹¹⁾。

しかし、そもそも記憶が可能的潜在的行動であり、脳は外部からの情報伝達を調整する運動機構であるという定義の根拠はどこにあったらう

か？それは、実証的な事実から導かれたというよりも、むしろベルクソンの独創的な「概念」によって見い出されたのではないだろうか？これが拙論で提起したい第一の主張である。このことを理解するためには、『物質と記憶』という著作がそもそも何を目的として書かれたかを知らなければならない。

3. 『物質と記憶』：その目的と意義

これから『物質と記憶』で提示されるベルクソンの哲学的主張を見ていくが、特にベルクソン独自の「概念」（イマージュ、純粹知覚、純粹記憶）の論理を前提として議論が進められていることに注目する。たしかに、ベルクソンは自説の根拠として科学的な研究が示す事実を提示する。しかし、ベルクソンの推論は多数のデータによって仮説を証明する「帰納的推理」ではなく、むしろ「演繹的推理」である。つまり、ベルクソンは事実によって仮説を証明するのではなく、仮説の論理によって事実を解釈しているのではないだろうか？だとすれば、ベルクソンの理論は実証的な事実による証明よりも、独創的な概念の創造によって構築されているといえるはずである。

『物質と記憶』の主題は「心身関係」の問題の解決である。デカルト主義的な心身二元論では心身は分裂している。この乖離を回復することがベルクソンの目的である。従来の「空間的立場」から「時間的立場」（持続）に立つことでこの難問は克服される。

ベルクソンは脳の活動（物理現象）を知れば、精神現象も同時に分かるという立場を批判する。なぜなら、これらは空間の立場に立っているからである。記憶が脳に局在する、という説は記憶を空間の中に実在する形ある「事物」としてとらえることを条件とするからである。

3-1. 脳は表象をつくらない

今、目の前にあるリンゴを見ているとしよう。わたしの心にあらわれるリンゴの姿。それが、リンゴの表象（la représentation）である。科学は、今見えているリンゴの表象は脳の活動によって生まれると主張する。しかし、ベルクソンはこれを否定する。なぜなら、私の脳は「イマージュ」だからである。

3-1-1. <イメージ> (image)

「イメージ」はベルクソンの物質の定義である。イメージは観念論と実在論の中間的存在である。仮に私たちが死んでも、宇宙は存在し続けるはずである。よって、イメージはただの観念ではない。だが、私たちは目の前にあるリングを知覚する。それは私たちの意識にあらわれる表象でもある。

ところで、宇宙全体のイメージは自然法則に従って必然的な運動（作用／反作用）をしている。それゆえ、新しいものの創造はない。だが、世界には特殊なイメージがある。それが「私の身体」(mon corps)のイメージである。私の身体は外的な作用に対して反作用を遅らせたり、反作用を行わないことができる。つまり、私の身体は作用にたいする反応に選択の幅をもたせ、必然的な関係に不確定性を持ち込むのである。それゆえ、身体がもつ反応の不確定性は新しいものの創造、あるいは自由の可能性を含むのである。このような身体イメージは「行動」の中心(le centre de l'action)である。そして、脳も身体と同様イメージである。脳の役割は行動の不確定性をコントロールする調整機関である。身体と同様脳も行動にかかわる器官である。なぜ、脳は表象を生まないのか？ それは脳も、程度の差はあるがイメージ(=物質)であり、イメージがイメージをつくることはないからである。石がリングを作り、リングが月を作ることではない。そして、脳という宇宙全体からすれば小さな部分に過ぎないものが、世界全体のイメージを作るというのもありえない。部分に全体が含まれることはない。このように、物質としての脳は本質的に精神とは異なるものであり、それゆえ脳内に精神が内在することもないのである。このようにベルクソンが脳は程度の差はあれ本質的には作用／反作用の関係に基づく物質の運動機構である¹²⁾、と定義しているのは重要である。なぜなら、ここでの脳の役割の定義は「イメージ」というベルクソン独自の概念を前提として演繹的に論証が展開されるからである。つまり、脳は物質的な運動をつかさどり、精神は脳から独立するという定義は、脳はイメージ全体の部分であり、部分は全体を含まないがゆえに脳は表象を生まないという論理を前提として成立しているのである。

次に、知覚の役割を考える。イメージは知覚されてはじめて私の身体にとって意味をもつからである。ベルクソンは物質の知覚もまた行動の一形態であって、認識ではないとする。

3-1-2. <物質の知覚>

果物かごの中にある、リンゴに目がとまったとしよう。このとき、知覚されたリンゴを食べることができる。また、あまりおいしくなさそうなので食べるのを止めることができる。このような行動の可能性をもつ行為が知覚（*la perception*）である。かごの中に、リンゴだけでなくバナナやメロンもあるとすれば、なぜリンゴだけが知覚されるのか？ それはその人がリンゴを食べたかったからである。いいかえれば、現在の行動に必要なことだけを全体から切り取ること、これが可能的潜在的行動（*l'action possible ou virtuelle*）としての知覚である。たとえば、新宿駅の雑踏の中から、友人の顔を見つけたり、声を聞き分けたりできるのが知覚である。知覚の役割は必要な行動のための選択であり、対象の認識ではない。

ところが、このような知覚の純粋な能力は日常のなかでは分からない。なぜなら、知覚は普通かならず記憶と結びつくからである。今知覚された目の前にいる人が、他人ではなく友人だと分かるためには記憶が必要である。このように、現実の生活で記憶をとまわらない知覚はない。ベルクソンは知覚の記憶をとまわらない純粋な役割を見いだすために「純粋知覚」（*la perception pure*）という仮想的概念を使って思考実験を試みる。

3-1-3. <純粋知覚>

本来の知覚から記憶を除いた純粋知覚は純粋物質（純粋空間）である。なぜなら、記憶とは時間的な継起としての精神を成立させるものであり、記憶がないことは、過去も未来もない純粋な現在を意味するからである。純粋物質の対極にあるのが現実の行動にかかわらない純粋精神（純粋記憶）である。この二つの仮想的概念があらわすのは実在のイメージの物質面の極限と精神面の極限である。

宇宙に実在するイメージはただ存在するだけである。だが、私たちが必要性にしたがって知覚するとき生じるのが表象である。表象はイメージ全体から一部を切り取ったものである。それゆえ、表象は不完全なイメージ、欠如したイメージである。このことは純粋知覚が生み出す表象はイメージの一部であり、物質であるということである。つまり、存在するイメージと知覚された表象のあいだには程度の差異しかなく、本質的には同じものだということである。要約すると、純粋知覚は物質のみを対象とする。純粋知覚は仮定として記憶を除いているので記憶は物質と

はかかわらないことになる。脳は物質であるという「イマージュ」の論理を前提とすれば、非物質的な記憶は脳から独立すると結論できる¹³⁾。これがベルクソンの説明の手順である。

このように、ベルクソンは「純粹知覚」という概念を提示することで純粹記憶の存在を予見し、物質と精神の関係を見い出すのである。これは概念による思考の創造的な飛躍である。

ところで、記憶が身体の外にあるということの意味は何だろうか？ 次に問われるのが心身関係の問題である。

3-2. 時間の立場の導入による心身関係の分裂の回復

精神と物質の関係を考えるのに、なぜ記憶が重要なのか？ それは身体は時間的な継起の途上にあり、物質の時間性の根拠こそ記憶だからである。それゆえ、記憶を考えることは、時間的な立場で心身関係をとらえることである。現在知覚する感覚と過去の記憶の違いは何だろうか？ 感覚は身体の一部で感じられる行動の源泉であり、空間的な延長をもつ。反面、行動にいつさいかかわりをもたない記憶、つまり、眠ったままの「純粹記憶」(la mémoire pure) は非延長である。これは意識的なものと無意識的なものの関係でもある。意識的なものは、つねに「現在」においてあらわれる。行動が原理的に現在において行われるのだからこれは当然である。逆に、無意識的なものは、ただ無力であること、現在の行動には無用であることである。したがって、純粹記憶が非延長で非存在なことの意味は、「現在の行動に無用である」ということにすぎない。ところで、このような形もなく存在を確かめることもできない純粹記憶は一体どこにあるのだろうか？ この点が読者を悩ます最大の問題である。ベルクソンは、空間的な実在については直接的、現在的に知覚していないものでもその存在は認められているという。たとえば、実際に目にしていなくても部屋の壁の外には街があり、夜空に星々や月が輝いていることを疑うことはない。空間的に意識外の存在を認めるなら、時間的な意識外の存在である純粹記憶(精神)の独立した実在を認めてもいいのではないか。ベルクソンは非現在(無意識)的なものの実在をこのように説明する¹⁴⁾。

そして、ベルクソンは、空間の立場¹⁵⁾に立つ限り心身関係の分離は避けられないと主張する。なぜなら、空間の立場では「現在」を「存在する」(le présent ce qui est)と定義するが、その論理的帰結として「過去」を「存

在しない」(*le passé ce qui n'est pas*)と定義せざるをえなくなるからである。ここには原理的に越えられないアポリアがある。

L'obscurité de ce problème, dans l'hypothèse dualiste, vient de ce que l'on considère la matière comme essentiellement divisible et tout état d'âme comme rigoureusement inextensif, de sorte que l'on commence par couper la communication entre les deux termes. Et en approfondissant ce double postulat, on y découvre, en ce qui concerne la matière, une confusion de l'étendue concrète et indivisible avec l'espace divisible qui la sous-tend, comme aussi, en ce qui concerne l'esprit, l'idée illusoire qu'il n'y a pas de degrés, pas de transition possible, entre l'étendu et l'inétendu.

MM,p.247.

これを解決するのが時間の立場である。時間の立場からみれば現在は「存在しつつある」(*le présent ce qui se fait*)ものである。ベルクソンは「現在」という固有の点があるという認識は時間の流れを分割可能な線上の一点とみなす空間の立場による錯覚に過ぎないと批判する。時間の継起とともに持続する私たちの現在の意識は直前の過去と直後の未来をつなぐものであり、「過去・現在・未来」という区別は持続の相から見れば、時間の空間化によって与えられる虚構的な記号なのである。それゆえ、時間の立場に立てば、現在は存在するとも存在しないともいえない両義的な存在である。ベルクソン哲学に大きな影響を受けて時間について思索したジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévitch, 1903-1985) の表現を借りれば現在の瞬間とは「ほとんど無 (presque rien) としか言い得ないものなのである。ここまでの話は、1889年に発表された第一主著『意識に直接与えられたものについての試論』(*Essai sur les données immédiates de la conscience*)ですでに展開されていたものであるが、第二主著である『物質と記憶』(1896)では、意識と身体の関係について時間の立場の視点が導入される。それは精神(非延長)と物質(延長)の関係を過去と現在の間に無数にある持続の緊張の変化の度合いとして見ることである。

À une distinction spatiale nous substituons une distinction temporelle [...] si le rôle le plus humble de l'esprit est de lier les moments successifs de la durée des choses, si c'est dans cette opération qu'il prend contact avec la matière et par elle aussi qu'il s'en distingue d'abord, on conçoit une

infinité de degrés entre la matière et l'esprit pleinement développé, l'esprit capable d'action non seulement indéterminée, mais raisonnable et réfléchie. Chacun de ces degrés successifs, qui mesure une intensité croissante de vie, répond à une plus haute tension de durée et se traduit au dehors par un plus grand développement du système sensori-moteur MM, p.249.

行動が現在の延長的な身体において遂行されるとすれば、現在の行動にかかわらない純粹記憶とは非延長、非存在である。この意味で精神と物質は本質的に異なるものであるが、私たちが現在の行動のために意識的、無意識的に行っている再認（想起）の能力は、非延長的な記憶が記憶心像として喚起され、現在の行動として現実化することで延長的な身体と結びつく可能性を示唆している。記憶は行動に無用なときは非延長だが、必要なときには延長となる。前者は持続の緊張の収縮状態、後者は緊張の弛緩状態である。ここでいわれている緊張の度合いとは、たとえば虹の色彩が実際には5色でも7色でもなく、赤から紫までの連続した波長であることに似ている。つまり、過去の記憶と現実化する身体の行動の間には光のスペクトルのように明確な境界線のない不可分な意識の強度の変化があるのである。

C'est dans le passé que nous nous plaçons d'emblée. Nous partons d'un « état virtuel », que nous conduisons peu à peu, à travers une série de plans de conscience différents, jusqu'au terme où il se matérialise dans une perception actuelle, c'est-à-dire jusqu'au point où il devient un état présent et agissant, c'est-à-dire enfin jusqu'à ce plan extrême de notre conscience où se dessine notre corps. Dans cet état virtuel consiste le souvenir pur. MM, pp.269-270.

このようにベルクソンは時間の立場をとることによって物質と精神の間にある絶対的な乖離を和解させ、心身が結合することを見出すのである。

終わりに：ベルクソン記憶理論の意義

ここまで、ベルクソンの記憶理論が現代脳科学の観点からは覆される可能性を示し、他方でベルクソンの論理が科学的事実ではなく独自の哲学的概念に拠っていることを指摘した。そして、科学的方法（空間的立場）が孕む問題をベルクソンが哲学的方法（時間的立場）によって解決することを見てきた。

今日の科学的見地からは否定されたかに見えるベルクソンの記憶論の重要性は一体どこにあるのだろうか？ それは記憶の脳からの独立という仮説を支える概念を創造することによって、これまで科学だけでは見えなかった問題を明らかにした点にあるといえる。いいかえれば、ベルクソンが投げかけた概念の光は科学の意味と限界を照らしだしたのである。この概念の創造行為は思考の飛躍を可能にするヒントを私たちに与えてくれるのではないだろうか。あるいは、少なくとも科学の自明性に対する批判精神を保つ役割を果たしてくれるだろう。

注

¹⁾ MM : Bergson, *Matière et Mémoire : essai sur la relation du corps à l'esprit*, PUF, Quadrige, 1999. 下線強調は筆者（沖政）による。

²⁾脳科学者の茂木健一郎はこの問題が脳科学の「深刻な方法論上の限界」であることを指摘している。以下の著作を参照。

茂木健一郎『意識とはなにか — <私>を生成する脳』, ちくま新書, 2003

³⁾茂木健一郎, 天外伺朗 『意識は科学で解き明かせるか — 脳・意識・心に挑む物理学 —』 (ブルーバックス), 講談社, 2000, pp.55-60.参照。

⁴⁾たとえば, 次のようなベルクソンの哲学と科学 (心理学) の区別からするとベルクソンのいう科学とはここでいう実証主義的科学である。

« Comment en serait-il autrement, si la psychologie a pour objet l'étude de l'esprit humain en tant que fonctionnant utilement pour la pratique, et si la métaphysique n'est que ce même esprit humain faisant effort pour s'affranchir des conditions de l'action utile et pour se ressaisir comme pure énergie créatrice ? » (MM, p.8.)

⁵⁾ « [...] nous pouvons parler du corps comme d'une limite mouvante entre l'avenir et le passé, comme d'une pointe mobile que notre passé pousserait incessamment dans notre avenir. Tandis que mon corps, envisagé dans un instant unique, n'est qu'un conducteur interposé entre les objets qui l'influencent et les objets sur lesquels il agit, en revanche, replacé dans le temps qui s'écoule, il est toujours situé au point précis où mon passé vient expirer dans une action. » (MM, pp.82-83.)

« [...] c'est la tension croissante et concomitante de la conscience dans le temps. Non seulement, par sa mémoire des expériences déjà anciennes, cette conscience retient de mieux en mieux le passé pour l'organiser avec le présent dans une décision plus riche et plus neuve, mais vivant d'une vie plus intense, contractant, par sa mémoire de l'expérience immédiate, un nombre croissant de moments extérieurs dans sa durée présente, elle devient plus capable de créer des actes dont l'indétermination interne, devant se répartir sur une multiplicité aussi grande qu'on voudra des moments de la matière, passera d'autant plus facilement à travers les mailles de la nécessité. » (MM, p.280.)

⁶⁾現代脳科学関連の参考文献として本論では特に次の著作を参照した。
山元大輔『脳と記憶の謎 — 遺伝子は何を明かしたか —』, 講談社現代新書, 1997.

また, ベルクソン哲学と脳科学を比較した先行研究として以下のものがある。

・ Jean DELACOUR, « *Matière et Mémoire. A la Lumière des Neurosciences Contemporaines* » in Philippe GALLOIS et Gérard FORZY, *Bergson et les Neurosciences*, Institut Synthélabo, c1997, pp.21-27.

・ Jean-Noël MISSA, « *Une Critique Positive du Chapitre II de Matière et Mémoire de Bergson* » in *ibid.*, pp.65-83.

・ H. BEAUNIEUX, B. DESGARANGES, F. EUSTACHE, « *Matière et Mémoire et les Modèles Actuels de la Mémoire : De Bergson à Tulving* » in E. Jaffard, B. Claverie, B. Andrieu, *Cerveau et mémoires : Bergson, Ribot et la neuropsychologie*, Osiris, c1998, pp.95-112.

【解題】いずれの論文も現代脳科学の観点から, ベルクソンの脳の定義に誤りがあることを指摘している。特に, 「脳は行動のみにかかわる器官であり, 表象は作らない」という主張は否定される。ただし, DELACOUR, BEAUNIEUX らの論文は, 脳科学の新たな成果からベルクソンの誤りを指摘しつつも, たとえば, 現代の記憶分類モデルとの共通性などに着目してベルクソンの先見性を評価している。これとは対照的に MISSA はベルクソンの理論は実証科学とは何の関係もないものであり, ベルクソン独自の論理によって構築されたものであると結論する。本論は, DELACOUR, BEAUNIEUX らのように現代脳科学との共通性よりも, むしろ科学とは異なった哲学としての記憶論を強調するという意味で MISSA の結論に近いといえる。ただし, 「科学的ではない」ということを否定的に捉えるのではなく, 肯定的に捉えることが本論の趣旨である。

⁷⁾ « *Maintenant, s'il y a véritablement des souvenirs déposés dans les cellules de l'écorce, on constatera, dans l'aphasie sensorielle par exemple, la perte irréparable de certains mots déterminés, la conservation intégrale des autres. En fait, ce n'est pas ainsi que les choses se passent.* » (MM, p.131.)

⁸⁾ « [...] la perte des souvenirs est généralement brusque [...] les souvenirs détachés de la mémoire sont quelconques, arbitrairement et même *capricieusement* choisis : ce peuvent être certains mots, certains chiffres, ou même, souvent, tous les mots d'une langue apprise. » (MM, p.132.)

⁹⁾ « *Dans les « amnésies systématisées » des hystériques, par exemple, les souvenirs qui paraissent abolis sont réellement présents ; mais ils se rattachent tous, sans doute, à un certain ton déterminé de vitalité intellectuelle, où le sujet ne peut plus se placer.* » (MM, p.189.)

¹⁰⁾ MM, pp.266-267.

¹¹⁾経験科学の方法論は一般に「帰納」(induction)と呼ばれ, その反語が「演繹」(déduction)である。帰納は個別的な事実から一般的な法則を導くことで証明し, 反対に演繹は一般的な法則をもとに個別的な事実を

証明する。たとえば、演繹の場合「すべての人は死ぬ」という一般法則から「ソクラテスは死ぬ」という命題が導かれる。このとき特徴的なのが、演繹によって導かれた個別的な事象は絶対的に正しいということである。もちろん、絶対的に正しいという意味は本質的に正しいからではなく、論理の枠組み上、正しいとみなすという態度である。なぜなら、演繹によって導かれる個別的命題は前提となる一般命題にすでに含まれているとみなされるからである。そのため、「すべての男はプレイ・ボーイである」（一般命題）ゆえに「ソクラテスはプレイ・ボーイである」、という一見おかしな結論も認めざるをえない。

これとは逆に、経験世界の個別的な事実から一般法則を見いだすのが、帰納である。「ソクラテスは死んだ」、「仏陀も死んだ」、「聖徳太子も死んだ」ゆえに「すべての人は死ぬに違いない」という論理である。なぜ、端的に「死ぬ」とせず「死ぬに違いない」となるのかというと、演繹の場合と違って帰納論理による帰結は蓋然的な確実性しかもたないからである。たとえば、将来科学が発達して不老不死の薬が発明されないとは誰も断言できないからである。（未来に何が起こるかには誰も知らない。）科学が見いだす法則は、無数にあるはずの経験的事実のほんの一部を利用して、そこから一般法則を導きだすのだが、すべての事実が本当に法則に従っているかどうかチェックすることは物理的に不可能である。それゆえ、一度証明された法則を否定する（反証する）ような事実が発見されない限りはその法則をとりあえず正しいとみなそう、という態度が科学的真理の真の姿なのである。この点を明確にしたのはイギリスの科学哲学者カール・ポパー（Karl Popper, 1902-1994）である。

¹²⁾ MM, p.19.

¹³⁾ « [...] puisque la perception pure nous donne le tout ou au moins l'essentiel de la matière, puisque le reste vient de la mémoire et se surajoute à la matière, il faut que la mémoire soit, en principe, une puissance absolument indépendante de la matière. » (MM, p.76.)

¹⁴⁾ MM, pp.157-161.

¹⁵⁾ MM, pp.244-245., p.248.

Bergsonisme et Neuroscieuce

— sur la possibilité de la théorie de la mémoire de Bergson
contre la science —

Hiroharu OKIMASA

Henri Bergson soutient dans *Matière et mémoire*, paru en 1896, que la mémoire est indépendante du cerveau. Cette théorie de la mémoire originaire est très curieuse pour notre sens commun actuel. Mais, paradoxalement, bien que non scientifique en apparence, elle est scientifiquement justifiée par le fait expérimental. C'est l'un des points les plus intéressants dans la théorie de la mémoire de Bergson.

Dans notre étude, nous examinerons tout d'abord, du point de vue de la neuroscieuce contemporaine, le rôle du cerveau et de la mémoire que Bergson a défini. Puis, nous montrerons que les connaissances récentes de la neuroscieuce sont susceptibles de fournir une preuve contraire au postulat de Bergson.

Cependant, à notre avis, ses thèses principales – le cerveau est l'organe de l'action, pas celui de la représentation ; la mémoire est de nature spirituelle, le cerveau n'est pas le dépositaire des souvenirs – se fondent sur les notions originaires: « l'image », « la perception pure », « la mémoire pure », pas sur les données positives et pas non plus sur le fait expérimental. **Le point de vue du temps** est à l'origine de ses notions. C'est parce qu'il pense en durée (sub specie durationis) . Au travers de cette vue, il éclaircira l'aporie de la scieuce qui se fonde sur **le point de vue de l'espace**. Par exemple, sous le point de vue de ce dernier, le corps est l'étendu, l'esprit est l'inétendu. Donc, les deux s'opposent absolument. Au contraire, sous le point de vue du temps, ils sont considérés comme le degré de la tension de la conscience qui dure. C'est-à-dire, l'un est la détente, l'autre est la contraction. Ils ont donc la possibilité de s'unir bien que la matière diffère essentiellement de l'esprit.

En conclusion, on peut dire que le bergsonisme joue un rôle important pour maintenir l'esprit critique contre l'évidence de la scieuce.